

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 20 日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2014

課題番号：25560124

研究課題名(和文) 日本におけるムラージュの系譜 近代皮膚科を支えた技師たち

研究課題名(英文) Moulages (Medical Wax Models) in Japan: The Mouleurs Who Contributed to the Development of Modern Dermatology

研究代表者

石原 あえか (Ishihara, Aeka)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：80317289

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：2年間かけて、日本国内に残る明治から昭和前半まで使われた皮膚科ムラージュ(医学模型)を写真が専門の大西と調査・記録した。主要大学医学部皮膚科教室(東京・慶應義塾・北海道・九州・名古屋・金沢ほか)および博物館等の協力を得て、歴史的標本を記録しつつ、各ムラージュ師の経歴や皮膚科医との関係なども明らかにした。皮膚科ムラージュと同様に、貴重なキノコや寄生虫の蠟製標本も研究対象とした。欧州ムラージュ修復プロジェクトの拠点ドイツ・ドレスデン衛生博物館とも連携し、2014年夏にはドレスデンで修復師とのインタビューも行った。研究成果は、論文だけでなく、2015年中に書籍として公表予定で、現在準備を進めている。

研究成果の概要(英文)： For the past two years our project team surveyed and photographed the extant dermatological moulages (medical wax models) used in Japan from the Meiji through the first half of the Showa eras as medical educational tools.

Thanks to the generous cooperation of the dermatology departments of major hospitals and museums housing such collections throughout Japan, the project team collated photographs and records of these historical moulages with information on the career of each mouleur (moulage producer) and his specific relationship with each individual dermatologist. This project also focused on wax models of mushrooms and parasites used in hyphal study and medical research. In cooperation with the Deutsches Hygiene-Museum in Dresden, Germany, the project team conducted an interview with a nationally-accredited moulage conservator at her studio in Dresden.

The project research results will be presented as a series of papers and as a book, scheduled for publication in 2015.

研究分野：ドイツ語ドイツ文学・科学史

キーワード：近代医学史 皮膚 ムラージュ(医学標本) ゲーテ 土肥慶蔵 伊藤有 ドレスデン衛生博覧会

1. 研究開始当初の背景

研究代表者・石原がムラージュの存在を知ったのは15年以上前、専門のゲート研究を通じてである。19世紀前半から欧州で医学に導入されたムラージュの作成にドイツ詩人ゲートはかなり早くから関与しており、代表者はこれまでもイエーナ大学解剖博物館(一般非公開)やベルリンの医学史博物館等で調査をしてきた。

日本国内では2002年の日本皮膚科学会創立100周年を機に、貴重な史料としてのムラージュ保存が議論された時期もあったが、10年を経た現在も皮膚科学会では包括的な調査は行われておらず、その間に作品は老朽化し、また当時を知る研究者や技師も逝去され、聞き取り調査が難しくなっていた。

本課題については資料調査と文章による歴史再構築は当然ながら、画像としての記録が不可欠だった。写真が専門の分担者・大西が撮影を引き受け、本研究が実現した。

2. 研究の目的

「ムラージュ Moulage」は、鋳型をもとに作られた「蠟製標本」である。蠟を使うだけでなく、病変・欠損・先天性異常などを直接患者から石膏などで型取りし、大きさ・形・構造はもちろん、彩色も忠実に再現している点が特徴的である。ムラージュは近代医学、特に20世紀前半に皮膚科・性病科の研究と教育に重要な役割を果たした。また名工・伊藤有をはじめ日本製ムラージュは、欧米の衛生博覧会にも出品され、常に高い評価を受けたが、現在ではムラージュ師も逝去し、経年劣化によりムラージュそのものも消滅の危機にある。本研究は、この医学史上重要な文化財であるムラージュの日本における受容・普及および現状を把握し、映像データとして記録する。同時にムラージュ師の系譜および各技術者に関する情報を収集し、体系的にまとめようとする本邦初の試みである。

3. 研究の方法

基本的に代表者の石原が関連資料を調査し、ムラージュの所蔵が判明している大学等研究機関の担当者と連絡をとり、できるだけプレ調査に出向くようにした。所蔵機関についての情報は、具体的には皮膚科医・長門谷および小野の報告書を参考にした。

プレ調査では、担当者や作業の進め方について詳しく打ち合わせ(特に撮影条件等)をするだけでなく、各大学専属ムラージュ師に関する資料を附属図書館・文書館や皮膚科学教室等でも閲覧・収集に努めた。手間はかかるが、結果的に事前調査を挟むほうが、双方の理解も深まり、作業が円滑に進められることから、できるだけこの方法を踏襲した。

1年目の最初は点数の少ない北里柴三郎記念室から始め、この時、分担者の大西と画像

データ使用についてのガイドラインの必要性を強く意識した(以後1年ほどかけて、最終的な画像データ取扱いのアウトライン規定を作るまで、相互に議論を重ねる必要が生じた)。

本プロジェクトに賛同・理解を得られ、撮影許可がおりた場合(少数の例外ではあるが許可が得られないケースもあった)、改めて分担者・大西と本調査兼撮影記録作業に赴いた。プレ調査で得た情報はすべて共有し、正味1~2日で作業の効率化を意識した。博物館のような公的施設での撮影は、特に見学者の妨げにならないよう、注意を払った。

撮影方法については、蠟の素材でできている標本を傷めないよう、熱を発生するライティング機材の使用は一切行わなかった。そのかわりLED懐中電灯を複数本使って、クールライトの特質を活かしたライティングを工夫した。

被写体への光の当て方は、真正面からまんべんなく当たる順光、被写体の横から光が当たる斜光、後ろからの逆光の3種類が基本である。さまざまな光を活用しつつ、しかしムラージュについては皮膚病変部の質感描写を際立たせるため、側面から這うように流れ込む斜光線を多用した。

撮影したデータは分担者の大西が責任をもって一括保管・整理し、石原は主にコンタクトシートを用いて、各所蔵機関のムラージュの画像情報と収集した文書資料を結びつけながら研究成果をまとめている。

4. 研究成果

2年間を通して、計画的に日本国内の研究施設に現存する皮膚科ムラージュを写真担当の研究分担者・大西と調査・記録した。

主にご協力いただいたのは、旧帝国大学系の医学部皮膚科教室や大学附属博物館などである。具体的に調査先を挙げると、東京都内(東京大学皮膚科・目黒寄生虫館・北里柴三郎記念室・慶應義塾大学など)のほか、北海道・九州・名古屋・金沢・九州などの研究機関で調査・撮影を行った。

今回のプロジェクトで各施設が所蔵するムラージュの調査・撮影を申請したことが契機となり、当該皮膚科教室やムラージュの管理者にムラージュの歴史的価値を再認識された感触が少なからずあった。

なお代表者は、これまで調査を行った日独両国のムラージュ関係の責任者・担当者たちと定期的に連絡をとり、情報を交換しつつ、成果活用や連携の方法を相互に探っている。このようにムラージュの記録・保存に関した問い合わせを中心としたネットワークが自然に形成されつつあるのも、本研究成果のひとつと見なせるだろう。

なお、最初の2014年度には中間報告として石原が紀要等に2本の日本語論文、また口頭発表を2回行う一方、大西は九州出張先の九

州大学文学部でのレクチャー講義で本プロジェクトについて語る機会を得た。

2014年および2015年の夏季休暇を利用して代表者・石原は、デュッセルドルフ、ハイデルベルク、ドレスデンなどドイツ国内主要関連都市の研究施設でも資料収集を行った。2015年夏にはドレスデン衛生博物館（略称DHMD）を拠点に調査を行った際は、州立文書館や同州立民族博物館などでも詳細な文書資料収集や情報交換を行った。うち民族博物館での1911年のドレスデン国際衛生博覧会（略称DHA）において日本館で展示された6体の「生人形」については保存庫で現存を確認し、その経緯や背景などをまとめ、その一部を紀要で公表した。1911年・1930年の2回にわたるDHAでの日本人皮膚科医たちの関与についても、南山大学との共同シンポジウムで発表し、さらに論文集で内容を補充・発展させた内容を公表した。

DHMDと交渉の末、特別に撮影許可を得ることができ、9月上旬に大西が当初予定になかった短期間渡独し、海外撮影を行った。DHMD館内撮影また修復工房でのインタビューは大きな意義があったと考えている。

なお被写体であるムラージュについて言えば、身体の患部に直接型取りして作るため、形の再現性においては細部にいたるまで精確である。しかしその石膏の雄型に蝋やパラフィンの混合物を混ぜて流し込んで作った雌型は、蝋の成分や配合比率により色や形、触感などに微妙な相違が生じる。その後、凝固した雌型に彩色を施していく過程でムラージュ師の本領が発揮されるわけだが、ムラージュ師の技法を比較すると明らかな相違が認められる。しかし各ムラージュ師と技術の関連づけには、さらなる研究が必要だろう。

本研究では、研究者同士で画像データ使用のガイドラインから厳密に議論・設定せねばならず、また被写体が倫理的な部分にも抵触するところがあるため、所蔵機関との辛抱強く交渉しながら信頼を得ていくことが不可欠であった。従って本研究課題の遂行は予想以上に困難を極めたが、主要な研究施設のムラージュは計画通り撮影記録ができたので、十分な結果が得られたと思う。

一連の成果はこれから、分担者・大西が撮影したムラージュ写真とともに学术论文や書籍として順次公表する準備を進めている。上述したように、本共同研究の過程で画像データのガイドラインを試行錯誤しつつ作っていった経緯もあり、撮影した画像等を公表すること時代に、当初はデリケートな問題が多々絡んでいたため、途中での画像データの公表・公開はあえて意図的に行わなかった。

2015年度中を目標に、一連の写真を効果的に配した一般向けの日本のムラージュに関する書籍刊行を準備中である。専門的な症例については、別途、皮膚科学学術専門誌による連載・公表を2015年夏より予定しており、初回原稿および写真は提出済みである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計4件)

石原あえか、「近代医学と人形 ドレスデン国際衛生博覧会（1911）に出展された日本の生人形と節句人形」、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要『言語・情報・テキスト』Vol.21（2014）、pp.29-42.（査読無）

石原あえか、「1911年および1930年のドレスデン衛生博覧会 日独仏における近代医学交流史の一例として」、『南山大学地域研究センター共同研究 2013年度中間報告集』（2014年3月）pp.159-170.（査読無）

石原あえか、「ゲーテと木下空太郎 皮膚科学との関わりを中心に」、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要『言語・情報・テキスト』Vol.20（2013）、pp.1-12.（査読無）

石原あえか、「科学と芸術のはざままで ゲーテ時代の大学絵画教師からムラージュ技師まで」、日本独文学会機関誌『ドイツ文学』146号（2013）、日本独文学会（郁文堂）pp.88-102.（ドイツ語レジュメ付・査読有）

〔学会発表〕(計2件)

石原あえか、「日仏独における近代皮膚科受容史 1911年ドレスデン衛生博覧会を中心に」、2013年12月7日 南山大学・東京大学共同シンポジウム「科学知の詩学」、東京大学駒場キャンパス（東京都目黒区）

石原あえか、「ゲーテと皮膚科学 その先見性と近代日独独医学交流史まで」、2013年7月16日 東京工業大学・火ゼミ（科学史・技術史の研究会）運営委員会、東京工業大学・大岡山キャンパス（東京都目黒区）

〔図書〕(計1件)

石原あえか、「ドレスデン衛生博覧会（1911/1930）二度の国際博覧会参加に見る近代日独医学交流史」、真野倫平編集『近代科学と芸術創造 19～20世紀のヨーロッパにおける科学と文学の関係』行路社（南山大学地域研究センター共同研究シリーズ7）所収、2015年3月、担当部分はpp.169-186.

[* 以上、2015年4月現在、刊行準備のものは含まない]

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

大西成明、2014年10月19日・20日、「骨格研究会」東京造形大学CS祭特別展示・造形大学展示室（東京都八王子市）の総合ディレクション。研究会メンバーが、動物の遺体からホネを取り出し、骨格標本を制作。その標本をスタジオ撮影した写真展示と、動物のホネの実物標本展示（直接、本研究課題のムラージュとは関連しないが副次的研究成果として）。

大西成明、「生老病死を凝視する 脳と骨そしてムラージュへ」、2013年10月30日、九州大学文学部ゲストトーク、九州大学文学部箱崎キャンパス（福岡県福岡市）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石原 あえか（ISHIHARA, Aeka）
東京大学・総合文化研究科・准教授
研究者番号：80317289

(2) 研究分担者

大西 成明（ONISHI, Naruaki）
東京造形大学・造形学部・教授
研究者番号：10585996

(3) 連携研究者 なし